上杉義男

うえすぎ・よしお

海軍大佐

経　歴
生：明治35年（1902年）ごろ
没：昭和18年（1943年）3月5日、ソロモン沖にて「峯雲」と共に戦死、享年42歳

大正8年（1919年）3月	17歳	広島県立福山中学校（誠之館）四年修了
大正11年（1922年）6月1日	20歳	海軍兵学校卒業（第50期）
昭和13年（1938年）12月5日	36歳	「弥生」艦長
昭和14年（1939年）3月8日	37歳	「沖風」艦長
昭和15年（1940年）11月15日	38歳	「松風」艦長
昭和16年（1941年）10月1日～ 昭和17年（1942年）11月19日	39～ 40歳	駆逐艦「潮」艦長
昭和18年（1943年）1月25日～ 昭和18年（1943年）3月5日	41歳	駆逐艦「峯雲」艦長

故 海軍大佐　上杉義男君を想う　小山 東一（大正9年卒）

故大佐は中学時代、私と同級だった。
生家は福山市の中心地帯にあって、少年の頃の私の家と一町と離れていなかった。
福原君の家とは3，4軒の隣りで親しい交りだった。
秀才だった大佐は中学4年から海軍兵学校に入ったので、その後の交友は年をもって数える間隔があったことがあるが、機会があれば必ず会う間柄であった。
近年は鎌倉に居を占めたので東京にいる我々と歓談の折があり、大東亜戦争勃発の風雲急を告げる頃、とりわけ今年の1月末、出撃の直前はよく会談した。
楽しく、懐しい夜々であった。
私共は戦争のことをききたがり、大佐は自分の武勲については控え目にはなしたが、それでも緒戦以来数次の海戦、大海戦に赫々たる勲功を樹てていることがよく分かったが、これ等のことは、少しは知り得た戦死の日時、有様と共に発表の時機でないので差し控える。
大佐の戦死は実に武人としてこれ以上立派な最後はあり得ない美しくも勇ましいものであっ

た。
海軍将校の方々もみなそう言われている。

最後に会った頃の大佐が、誠に円満、完成した人格を作り上げていたことは私の驚嘆したところで、高橋等君もしきりにこれを言っている。
君国のために生死の巷に出入するということが人間を完成せしめる実例を目のあたり見て、私は襟を正すと共に限りない羨望の念すら抱いた。
伝えられる大佐最後の艦橋上の従容不動の姿も私には生々と浮び上る。
大佐は少年時代からそうであったが、非常に落着いたところと洒脱なところとがあった。
これまでの烈しい戦闘に最も危険な部署について敵を撃滅しつづけたのは、この余裕綽々たる心境であり、態度であったと信ずる。

「何でアメリカの奴は義っさんの艦をうったんぢゃ」と高橋等君は言ったが、私も同じように思う。
これは理屈ではない。
押え切れぬ気持である。
敵は大佐の艦をうち、我々の同胞をうっている。
この仇は、それぞれの方法で必ず討たねばおかぬと誓ったことである。

大佐の偉動(ママ)はやがて伝えられるであろう。
詳しいことが発表されるであろう。
今は、とくに郷里を同じくする方々にそのときを待って頂きたく思う。
それは郷党に栄誉と感激を齎(もたら)すにちがいない。
それを敵米英撃滅の心の一礎石にして頂きたいと思う。　　(出典1)

出典1:『福山学生会雑誌(第95号)』24頁、福山学生会刊、昭和18年8月10日

関連情報1:『うみゆかば(潮騒)－故海軍大佐　上杉義男回想録－』、上杉公仁編、岡本書店刊、昭和50年

2005年5月18日更新:経歴●2006年6月8日更新:タイトル●2007年11月13日更新:経歴・本文・関連情報・出典●2008年2月7日更新:経歴●